



会誌3号

【目次】

会長挨拶	---	1
推奨のことば	---	2
日本精神から見た志賀哲太郎と台湾	---	3
志賀哲太郎先生顕彰のつどい	---	10
「志賀哲太郎小傳」抜粋	---	13
台湾教育に尽力した熊本の教師たち	---	21
訪台記	---	23
志賀哲太郎顕彰会ホームページのご案内	---	25
顕彰碑建立について	---	27

志賀哲太郎顕彰会

平成30年11月

【表紙写真】台中市大甲区の「文昌祠」

文昌祠は、中国の東晋代に蜀王を名乗った張育（篤学の士・張亜子）や北斗七星第4星の文昌星（柄杓になぞらえた杓部に当たる4つの魁星のうちの一つ・文運を司る星）が合わさった神格である。他に道教の朱衣神、南宋の学者・呂祖、後漢末の武将・関羽を合わせて五文昌と呼び、ともに祀ることが多い。張育は後に文昌帝君と呼ばれるようになったとも言われる。

祠廟は文昌廟、文昌宮、文廟、書院とも呼ばれ、張育の出身地である四川省を始めとして中国各地に存在し、台湾にも数多く造られている。厳しい科挙制度が確立されていく中でこの神への信仰が深まったものとされ、現代でも受験生に信奉されており、日本の天満宮（菅原道真公を祀るお宮・天神様）に対する信仰のあり方に似ている。

写真の大甲区の文昌祠には拳法修練のための一角があり、ここが文武両道の修行の場であったことが窺われる。

■ 会長挨拶

会長 宮本睦士 (益城町教育委員・益城の歴史遺産を守る会会長)



昨年 8 月に会誌 2 号を発行してから、あっという間に 1 年余りが経ちました。

その間、益城町の震災復興も少しずつ進み、新しい家があちらこちらに見受けられるようになって、町民の皆様の生活にも変化が感じられるようになりました。

それでも、道路や下水道など、随所で工事が行われており、インフラ整備にはまだまだ時間がかかりそうです。しっかりした町づくりのためには、じっくり腰を据えて取り組んでいかなければならないだろうと思って、復興の成り行きを見守っています。

本会では、昨年 11 月に第 2 次訪台団 12 名が台中市大甲区を訪問したほか、台南、嘉義、台北等の史跡を見学してきました。

100 年前、志賀先生が教育や町づくりに尽力され、「聖人」として祀られている台中市大甲区では、公所（役所）の熱烈な歓迎を受けました。翌日は、私達訪問団と公所の合同で、志賀先生と島村ソデさん（永く先生の家政婦を務められた）の墓前祭を行い、その後、公所の皆さんや歴史家張慶宗先生に関連史跡を案内して頂き、現地の小学校の見学についても配慮して頂きました。大甲国民小學では、昨春、津森小学校の児童が送った習字の作品や写真が「文化交流」と題して掲示板に展示されていました。劉來旺区長を始め、大甲区公所の皆さんや李金發校長の誠実な対応とこまやかな心遣いに感激した次第でした。

また、本年 2 月 25 日には、益城文化会館で、「志賀哲太郎先生顕彰のつどい」と「日台友好交流会」を開催しました。益城町、益城町教育委員会、日台交流をすすめる会との共催で行われたこの催しには、益城町内外から約 400 名の方々をご参加下さり、台中市大甲区からも王澤佳副区長以下 10 名の皆さんが参加して下さいました。

「顕彰のつどい」では、台北駐福岡経済文化弁事処の処長、戎義俊総領事の講演と熊本市の「語り座」代表、寿咲亜似さんの語りがあり、お二人の熱のこもったお話と演技に、参加者の皆さんも深い感銘を受けたようでした。

その後、同会館ロビーで行われた「日台交流会」は、稲田忠則町議会議長の挨拶に始まり、大甲区の訪熊団、在熊台湾人の皆さん、台湾人留学生も交えて 100 人余りの参加者による和気あいあいとした交流のひとつとなりました。森川智徳氏の詩吟や地元の子どもたちによる琴の演奏も花を添えてくれ、肥後古流会と白水会のご協力による抹茶のサービスも、台湾の人々には貴重な体験となったようでした。

台中市大甲区との学術交流の成果も踏まえ、昨年末に 170 頁余りの「志賀哲太郎資料集」も刊行しましたが、これは、今後、志賀先生に関する学術研究の定本となるであろうと自負しています。編著者の増田隆策さんは、現在、その増補版を編集中ですが、学術資料としての価値が更に充実していくことはまことに喜ばしいことです。

今後、顕彰碑を建立し、益城町が生んだ偉人、志賀哲太郎先生の顕彰をさらに形あるものとし、益城町民、熊本県民の皆様が郷土の誇りとして頂けるよう、また、何より子どもたちの希望にかなえられるように努めていきたいと思っております。

本会では、志賀先生の顕彰を柱として、益城町の復興と文化、教育その他の事業の推進に寄与して参りたく存じますので、今後とも、皆様のご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

■ 推奨のことば

本会顧問 稲田忠則 （益城町議会議長）



熊本地震から2年半が経ちましたが、余りにも大きな災害でありましたため、復興の道のりは大変きびしいものがあります。私もその一人ですが、仮設住宅等の仮住まいで不自由な生活を続けておられる町民の皆様も多く、先行きを思うと胸が痛みます。

そのような状況にもめげず、毎日を懸命に生きておられる町民の皆様のご努力と復興に向けて日々奮闘しておられる関係者の皆様のご尽力に、心から感謝を申し上げたく存じます。

益城町役場では、「第6次益城町総合計画」の策定に伴い、「益城町まち・ひと・しごと創生総合戦略」について検証や改訂を行うなど、具体的な取組みを検討中ですが、町議会としましても、これまでの行政の対応のあり方を検証しながら、今後の方針について、計画と戦略に矛盾が生じることはないよう、あらゆる角度から意見を述べてきたところです。

農家の皆さんの農地や商工業の皆さんの施設の復興整備、住民の皆さんの住宅地の整備等々、復旧・復興に係る総事業費は約 1,400 億円と試算されておりますが、町の財政状況を考えますと、私達は、これから長期にわたって大きな負担を強いられることとなります。議会としましても、町当局と協力関係を強化し、一体となって、この難局を乗り切っていかなければなりません。

国庫補助率のかさ上げや元利償還への交付税措置等のもとより、様々な支援策について関係機関に陳情するなど、町の負担の軽減を図って参りたいと思っております。

県道熊本高森線の4車線化や関係道路網の整備、役場庁舎の建替えと木山地区の区画整理事業など、50年後、100年後を見据えた町づくりの重大案件について、日々、論議が繰り返されております。

安心安全で暮らしやすいまちづくりは、将来を担う子どもたちへの贈り物でもあります。その意味でも、町民の皆様と手を携えて、この大事な局面に誤りなく対応して参りたいと思います。

地震は、私達に大きな災難をもたらしましたが、一方で、町民の皆様の互いの結びつきを深めてくれました。「災い転じて福となす」のことわざとおり、私達は、被災の経験を無駄にしてはならないと思います。

特に、子どもたちの心に残された傷跡は、大人には計り知れないものがありますが、子どもたちに希望と勇気を与えることは、町を美しく復興させることだけではできません。

私は、3年前、初めて志賀哲太郎先生の話をお聞きしたとき、この人は、四賢婦人や徳富蘇峰と同様に、益城町を代表する偉人の一人となるであろうことを予感し、顕彰会発足当時から、活動の手伝いをさせて頂いて参りました。

台湾で「聖人」と敬慕されている志賀先生の崇高な生き方は、大人だけでなく、子どもたちにも勇気と希望を与えてくれる多くの要素に富んでおります。

顕彰会では、志賀先生を機縁として、台湾台中市大甲区との交流を進め、小学校間の交流による国際教育の試みも行っております。

まだまだ、ささやかな活動ではありますが、この文化・教育活動が、やがて、様々な分野で、町の復旧・復興にも寄与していくであろうことを予感し、期待しているところであります。

一言、会のご紹介を申し述べますとともに、会の更なる発展を祈念いたします。

■ 日本精神から見た志賀哲太郎と台湾

台北駐福岡経済文化辦事處 處長 戎 義 俊 (えびす よしとし)

(※本稿は、平成 30 年 2 月 25 日に益城町で行われた講演の記録です。職名は当時のもの。)

～はじめに～

中国の孔子様による儒教の一環として「温故知新」という教えがあります。日本においても「温故知新」という古来の知恵が活かされているという気がします。歴史に学んでそれを生かし、よりよい明日を創る。そのために私たちは歴史を研究して、それを体系的に整理整頓する。その結果として精度の高い、そして多面的な歴史という情報が大切な判断材料として引き継がれていく。人類として、国として、地域として、一族として「温故知新」するためには、志賀哲太郎と台湾に関する歴史を正しく理解し、新しい発見を生み出すことが大事です。

益城町が生んだ郷土の偉人、志賀哲太郎先生は、台湾では今日まで忘れられることなく語り継がれ、大変尊敬されています。「命を懸けて教育にあたる」勇気と責任感こそが、その最大の理由であります。しかし残念なことに、志賀先生のごことは日本ではあまり知られておりません。本日の顕彰会の開催を機に、一人でも多くの日本の方に志賀哲太郎先生の偉業を知っていただきたいと思ひますし、ひいては日本の皆様への啓発になれば誠に意義深いことであると思ひています。

1 台湾は世界一の親日国家

(1)

現在、日本と台湾との交流は大変良好です。昨(2017)年、日本を訪問した台湾人は 456 万 5,873 人、台湾を訪問した日本人は 189 万 8,854 人、合計で 645 万 4,727 人も人的往来がありました。人的往来については、日本が正式な国交を持つ国との間でも 645 万人に達するところはありません。特に、ここ数年、訪日の台湾人は毎年 50 万人ずつ増えております。台湾の人口は 2,300 万人ですので、その割合から考えても、実に 5 人に 1 人が日本へ来たことになり、いかに両国が深くつながっているか、世界一良好な関係にあるかがお分かりいただけると思ひます。

数年前、台湾では九州専門の旅行雑誌「美好九州」が刊行され、九州旅行がブームになりました。特に、ここ熊本県は風光明媚なところが多く、温泉やグルメ、温かい人情など台湾からの観光客を魅了してやみません。私も 5 年前に福岡に着任して以来、こちらの益城町をふくめ熊本県を 110 回ほど訪問しております。どこを何回訪れても素晴らしい場所ばかりで、熊本の皆様には大変お世話になっております。

台湾人の日本旅行の人気はもとより、日本の皆様による台湾旅行も大変な人気です。ここ数年の日本人の海外旅行先ランキングでは、台湾は常に上位に入っています。順調な交流は観光だけではなく、経済・貿易・音楽・芸術・学術・スポーツ・ホームステイ・修学旅行などあらゆる分野での交流がスムーズに行われており、このように良好な友好関係を築くことができているのも、お互いに好感を持ち、お互いに信頼し合っている証(あかし)であると

心から嬉しく思っております。私が着任した年（2013年）、人的交流は350万人を初めて突破しましたが、2015年は530万人、2016年は619万人、2017年は651万人と増加の一途をたどっており、東京オリンピックが開催される2020年には700万人を超えると見られています。

次の世代に相互認識・相互理解を推進するために、私が約5年前に着任してから一番力を入れて進めてきた仕事は日本の高校生の台湾への修学旅行です。これまでに3回の修学旅行セミナーを開催し、九州山口における修学旅行生の数は、2014年に12校・1200名だったものが、2015年に19校・2200名、そして2016年は30校・5000名、2017年は40校・7000名になりました。実施した高校の先生方からは、現地の高校生との生きた交流を通して大変良い教育旅行となっているという話も聞かれます。

2018年1月に「全国修学旅行研究会」が発表した最新データ（2016年度分）によれば、日本全国における台湾への修学旅行は262校・4万1,878名で、校数、人数ともに米国（ハワイ・グアム・サイパンを含む）を抜いて第1位でした。10年前（2006年度）の3,552人と比べて約11.8倍に増えた背景として、台湾は親日的で心配なく旅行ができること、地方都市に直行便の就航が増え利便性が高まったことなどが挙げられています。

こんなに大勢の台湾人が日本に来たがるのは、美しい景色や美味しい食べ物を求める物見遊山だけではないと思います。本日お話しする“台湾に残された「日本精神（ジップンチェンシン）」が台湾人の家庭で親から子へ、子から孫へと刷り込まれた結果、第二の故郷を訪ねて心を癒したいという潜在的な気持ちがあるのではないかと思います。

（2）

よく台湾は世界一の親日国家であるといわれますが、その理由のひとつとして“報恩”があげられると思います。日本統治時代といわれる1895年からの1945年までの50年間、かなりの日本人が麗しき島（フォルモサ）と呼ばれていた台湾に渡りました。九州からも教師・技師・医師など2万人あまりの人々が台湾へ渡り、教育をはじめ、鉄道、港湾、道路、上下水道などの基本的なインフラ整備に尽力し、台湾を近代化の道へと導いたといわれています。特に熊本からは教師として台湾に渡った方が多いようです。自らを顧みず犠牲になった日本人も少なくありません。益城町の偉人、志賀哲太郎先生もそのお一人です。そのような日本人が「日本精神」をもって台湾に遺した功績を台湾の人々は忘れておらず、“たとえ一滴の水でも受けた恩義は湧き出る泉として恩返しをする”という「滴水之恩，湧泉以報」の気持ちを持ち続けているのです。

2 明治維新と台湾

（1）

今年は明治維新150年にあたりますが、明治維新と台湾は密接な関係性があるということに気がきました。1868年の明治維新以来、日本は欧米列強に引けをとらない近代国家樹立に全力を傾け、やがてそれを成し遂げましたが、その過程における日本統治の50年というのは明治・大正・昭和にかけてのことです。

いうまでもなく、明治は近代日本の事始めであります。台湾は明治時代の日本と同じ歩み

を進めてきたのだと思いますし、台湾での西洋化のプロセスは日本からもたされたものだと思います。また、日本は、欧米の植民地政策とはまったく違う政策を台湾に施し、むしろ植民地を内地化するような諸策を打ちました。

1895年から1945年の台湾における日本統治では、50年間で19人の総督が任命されましたが、中でも、台湾近代化の基礎づくりを推進したのが、第4代総督（1898年～1906年）の児玉源太郎と民政長官に後藤新平でした。後藤新平はドイツで医学を学んだ医者でしたから、生物学の観点から、日本国内の法制をそのまま文化・風俗・慣習の異なる台湾に持ち込むことは困難であると考え、台湾の社会風俗などの調査を行なった上で政策を立案し、漸次同化の方法を模索するという統治方針を採用し、金融・財政・治安・衛生などの制度確立、道路・鉄道・上下水道・ダムなどのインフラ建設に邁進しました。

日本は搾取するどころか「文明」を台湾に輸出して台湾を文明社会につくり上げました。あるいは武士道や明治の精神をはじめとする様々なこと、いわゆる「日本精神」を台湾に伝えました。日本統治の50年にわたって、その影響は台湾人生活の隅々にまで浸透してしまっただと言えます。たとえば、内地に東京帝国大学を建てたように台湾にも台湾帝国大学を設立しました。これは搾取型である欧米の植民地政策ではありえないことです。

ある意味、台湾人は日本統治時代に「日本人になった」といっても過言ではありません。台湾に生まれ、日本統治時代を経験した台湾の「日本語世代」は、明治維新とその後の日本の近代化が台湾にもたらした恩恵は非常に大きいと評価しているのです。

（2）

日本による台湾統治が始まって、まず日本が必要としたことは、台湾の人々への日本語の教育でした。日本は1895年4月に台湾総督府を開庁し、そのわずか3ヵ月後の7月に、「教育こそ最優先すべきである」として、日本全国から集められた優秀な志ある6人の教師により、台北・士林の芝山巖というところに最初の国語学校（日本語学校）「芝山巖学堂」を開校しました。

芝山巖付近の台湾人有力者の子弟を生徒として、日本語教育はスタートしましたが、翌年1896年の1月1日に6人の日本人教師（※「六氏先生」）と1名の用務員がゲリラの襲撃を受け命を落としました。当時の台湾では日本統治への反対勢力による暴動が頻発しており、周辺住民は教師たちに繰り返し避難を勧めていましたが、彼らは「芝山巖学堂」を離れず、死を覚悟した上で教育者として説得にあたることを選んだといえます。

※亡くなった6人の教師（「六氏先生」）

- ・楫取道明（山口県出身 38歳）一吉田松陰の甥
- ・関口長太郎（愛知県出身 37歳） ・中島長吉（群馬県出身 25歳）
- ・桂金太郎（東京都出身 27歳） ・井原順之助（山口県出身 23歳）
- ・平井数馬（熊本県出身 17歳）一熊本県済々黌（せいせいこう）出身

※ 彼らは「六氏先生」と尊称され多くの人から敬われている。芝山巖は台湾教育発祥の地とされ、「六氏先生」の慰霊碑には、今も献花が絶えない。

3 益城町が生んだ大甲の聖人・志賀哲太郎

(1) 熊本から台湾へ

「六氏先生」の事件により、日本による教育が中止されることはなく、益城町出身の志賀哲太郎先生は同じ年の12月に台湾に渡りました。日本統治がはじまってわずか1年後のことです。その頃の様子を志賀哲太郎顕彰会会誌から紹介しますと、「志賀が台湾に渡ったのは台湾領有の翌年の明治29(1896)年、30歳の時だった。台湾語習得の目的を兼ねて台北で酒店を営業するがうまくいかず、その後大甲近くの伯公坑で同郷河内村出身の島村袖(しまむらそで)を雇い、台湾縦貫鉄道の御用商を営んだ。ある夜、土匪(抗日ゲリラ)の襲撃に遭い、財物は取られ、危うく命を落とすところであったが、袖の機転により助かった。しかし、マラリヤにかかり危篤に瀕し、担ぎ込まれたのが大甲の鎮瀾宮(ちんらんぐう)の陸軍病院であった。九死に一生を得た哲太郎は袖の看病を受け療養につとめた。療養中に教員採用の募集を知り、弁務署で面接を受けて明治32(1899)年大甲公学校(小学校)の代用教員として着任した。当時の大甲公学校は文昌帝君を祀る文昌祠を使用し、志賀は文昌祠西側の一室を借りて住居とした。」

「台湾では当時、就学率が低く教育に対する理解が浅かった。このため開校当初の児童数は十数名であり、その中でも卒業したのは明治37年次には4名だけという状況であった。哲太郎は、学齢期の子供のいる家や、せつかく入学しても休んでいる子供の家を、一軒一軒足繁く訪ねて廻った。」「貧しい家の子には文具を買って与え、病気になれば菓子や絵本を持って見舞い、学費を払えない生徒には身銭を切ってこれを補助した。」「彼の熱意と愛情と誠心が大甲の人々の心に溶け込んで、大正期には生徒数も着実に増え、1923(大正12)年度の卒業生は百名に達した。出席率も県下一となり進学率もぐっと高まった。」(熊本が生んだ大甲の聖人“志賀哲太郎”会誌より抜粋)

(2) 「日本精神」を体現した哲太郎

まだ教育制度も定まっていない中、台中の大甲に縁を得、開設されたばかりの大甲小学校の代用教員となった哲太郎は、熱意と愛情をもって教育の重要性を説いて回り、転勤することのない代用教員の身分を自ら選択し、26年にわたり大甲を離れることなく、大甲子弟の教育に半生を捧げました。日本人も台湾人もお互いに尊敬し友情を深めるべきとして、「人権尊重」「公平無私」の態度で、献身的に初等教育に取り組み、大甲民に向き合ったのです。また、哲太郎は、知識の伝授だけでなく“礼儀”や“時間の観念”など自らが身をもって範を示し、まさに哲太郎の生き方そのものが本日のテーマである「日本精神(ジッポンチェンシン)」を体現したものであったといえるでしょう。「勇気」「忠誠」「勤勉」「奉公」「自己犠牲」「責任感」「遵法(じゅんぽう)」「清潔」といった日本の精神をもって生涯を貫いた哲太郎は常に住民と暮らしを共にし、住民や子弟から慕われていたといえます。

(3) 文昌廟に祀られる「大甲の聖人」

しかし、明治末期から大正時代に入ると、教育を受けた台湾青年たちが急速に民族運動に目覚めてきました。民族運動はやがて大甲にも広がり、公学校生徒の保護者や卒業生、台湾人教師などによる解放運動が見られるようになりました。総督府の一官吏でありながらも、常に教え子の立場に立ち続けた哲太郎は、とうとう教職の身分を解かれてしまいます。教え

子との師弟愛が深ければ深いほど葛藤と苦悩は深まり、ついに自ら死を選んでしまうのです。まさに台湾子弟の教育のために身を捧げたのであります。59歳の時でした。

哲太郎の遺言は次の通りであります。

- 一、自分の遺体は台湾式の土葬にすべし
- 二、書物はすべて大甲街民に寄付すべし
- 三、遺産は女中ソデに給えるべし

教え子のみならず大甲民は皆、先生の死を悼み哀しみました。葬儀の日には、住民・教え子はもちろん何のゆかりもない路地裏の人々までもがその死を悼み、手厚く葬られました。哲太郎の葬送の列は1キロメートルに及び、大甲民はまるで神様に礼拝するが如く、道ばたに線香を立て、供物を並べ、哲太郎を見送り、大甲の街全体が喪に包まれたといえます。

教え子の手によって、大甲を見下ろす鉄砧山南麓に祀られた哲太郎の遺徳はその後も語り継がれ、現在においても“大甲の聖人”として大甲民から慕われ尊敬され続けています。1966（昭和41）年には、世界中から哲太郎の教え子が集まり、「志賀先生生誕百年祭」が行われました。哲太郎の墓の周りには教え子の墓、島村袖の墓、そして百年祭を記念して建てられた顕彰碑が並んで立ち、その墓前には今でもお参りの人が絶えません。

2011（平成23）年12月、大甲区役所は、「志賀先生がかつて大甲公学校で教師として26年間にわたり1000人余りの台湾学生を教え、台湾各界に多大な貢献を残した」として、哲太郎を大甲の「文昌廟」に入れることを決めました。「文昌廟」とは、学問の神様（=文昌君）が祀られている場所であり、ちょうど日本の太宰府天満宮に学問の神様とされる菅原道真公が祀られているような存在です。また、哲太郎がかつて住居としていた「文昌廟」西側の一室は「志賀哲太郎記念室」となり、哲太郎の偉業を紹介し、後世に伝えています。哲太郎は大甲の聖人、まさに神様として大甲民から崇められ、今でも遺徳が慕われているのです。毎年4月には大甲区役所主催の慰霊祭も行なわれています。

4 日本精神は台湾に遺された

（1）

1895年から1945年までの日本統治時代の遺産は、ダムや鉄道などの物質的なものだけではありません。常に「公おおやけ」を考える道徳教育などの精神的な遺産です。台湾での教育は知識の伝授と共に、精神的な支柱として、嘘をつかない、不正なことはしない、自分の失敗を他人のせいにはしない、自分のすべきことに最善を尽くすという「日本精神」が教え込まれました。「日本精神」の浸透によって治安が良くなり、安心して生活ができる社会が実現したのです。

「日本精神」の中には、勤勉、進取の精神、強い責任感、法を守ること、人を思いやって和を尊び、忍耐することなどが含まれています。

1. 「和」→協調・根回し
2. 「公」→公に己を捧げる・滅私奉公
3. 「忠」→忠誠心・愛国心

4.「義」→義理人情に厚い

5.「勤」→勤勉性

(2)

「六氏先生」や「志賀哲太郎先生」のように、「命を懸けて教育にあたる」勇氣と責任感
は、教育者としての模範とされ、戦前の日本人の象徴的存在として敬われています。この「勇
氣と責任感」こそ、日本人が台湾で尊敬された最大の理由であると思っています。「日本
精神」というものを究極にするのならば「勇氣と責任感」に集約されるのではないかと常々
思っています。

「夫レ教育ハ建国ノ基礎ニシテ、師弟ノ和熟ハ育英ノ大本タリ」(夏目漱石)

教育は国づくりの根幹であります。台湾の諺に「十年樹木、百年樹人」(樹木を育てるに
は10年、人を育てるには百年かかる)というものがあり、人材育成の重要性が語られてい
ます。台湾近代化の基礎づくりをした民政長官である後藤新平の座右の銘は、「金を残す人
生は下、事業を残す人生は中、人を残す人生こそが上なり」。

まさに日本は台湾に人を残し、日本精神を残したといえるでしょう。

5 台湾人家庭における「口耳相傳」(口伝え)

台湾では、どのようにして、「日本精神」の良さが受け継がれてきたのでしょうか。それは『口
耳相傳』(口伝え)です。台湾全体の7割を占める台湾人家庭では、父母から子へ、祖父母
から孫へと日本のことが脈々と語り継がれてきたといえます。日本の時代を知る台湾の「日
本語世代」は(現在90歳以上)、自分達が学んだ「日本精神」を、自らの誇りとしてきました。
日本の良いところを子や孫に聞かせ、祖父母や親からの愛情とともに口伝えで記憶に刻まれ、
日本への親近感は自然に身につけているといっても過言ではありません。台湾人は「日本精
神」という言葉を使うことを好み、先ほど申し上げたように、勤勉や正直、約束を守るなど
もろもろの善いことを表現する時に使います。そういった「口耳相傳」こそ、最も影響があり、
強い効力を持つものではないでしょうか。

1994年の台湾映画に『多桑』という作品があります。年配の日本語世代をテーマにした
この映画は、実話を元に台湾で大ヒットしました。“多桑”と書いて“トーサン”、つまり日
本語の“父さん”のことで、戦後世代の呉念真監督が日本語世代の父親を描いたものでした。
日本びいきの父親の夢は、日本に行って皇居と富士山を見ることであるのです。日本の作家、
司馬遼太郎氏は、その著書の中で「1945年に分離するまで、そこで生まれて教育を受けた
台湾の人々が、濃厚に日本人だったことを、私どもは忘れかけている」(『台湾紀行』)と述
べておられます。また、台湾の李登輝元総統(1923年生れ)は「22歳まで受けた教育は
まだ喉元まで詰まっている」とおっしゃっているのです。

日本人は台湾に二つの遺産を残してくれました。ひとつは、近代社会の精神的基盤。もう
ひとつは、大和魂と明治の精神です。敗戦後の日本で忘れられてきたもの、忘れさせられて
きたものが、むしろ台湾で綿々と語り継がれている事実、日本人は目を向けなくてはなり
ません。

6 結び

私は 2013（平成 25）年 4 月に駐福岡総領事として着任して以来、機会あるごとに“台湾に残された日本精神”や、“日本精神こそが両国を結ぶ目に見えない強い絆である”ことについて日本の皆様にお話してまいりました。「日本精神」を体現し台湾の教育に命を懸けた益城町の郷土の偉人「志賀哲太郎先生」のことを、益城町の皆様の前で講演する機会を賜ったことを、とても光栄に思っております。ご関係の皆様とご来場の皆様に心から感謝申し上げます。

最後に、「恩返し」と「縁を大切に」という二つの事についてお話しさせていただきます。冒頭で述べましたように「日本精神」をもって台湾の発展に命をかけた方々に対する純粋な感謝の気持ち、それが「恩返し」です。本日は特に教育面において犠牲となられた「志賀哲太郎先生」と「六氏先生」の話しを致しましたが、その他にも道路・鉄道・上下水道・ダムなどのインフラ整備のために犠牲となられた日本人が大勢おられたことを忘れてはならないと思っています。

そして、「縁を大切に」といいますのは、私が常々、心がけていることです。縁というものは不思議で面白いものでございまして、人と人の関係だけでなく「縁は異なるもの味なもの」…町と町、国と国というものも、何か一つのきっかけによって上手く結ばれるものでございます。私は、志賀先生が現代につなぐ、「大甲と益城町との強い縁」を感じずにはおれません。志賀先生を通じて、大甲と益城町は約 120 年も前からつながっているのです。益城町の皆様には、ぜひ台湾へ行っていただきたいですし、特に若い世代の皆様には修学旅行や研修旅行などの機会を作ってください、大甲そして台湾を訪問していただきたい、そして台湾に息づいている「日本精神」を感じ、様々な体験や交流を通じてお互いを知ることで、未来の良好な関係の礎となる友情を育てていただきたいと願っております。

本日は、大甲から副町長をはじめ 10 名が益城町を訪問しておられますが、志賀先生によって結ばれた大甲と益城町の縁がさらに深まり、教育や文化を軸とした交流を通して友好関係を育てていただきますよう心から祈念いたしまして、本日の講演の結びとさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

【 前台北駐福岡経済文化辦事處處長・戎義俊氏のプロフィール 】

1953 年生。台湾輔仁大学日本語科卒業（1976 年）。日本慶応義塾大学研究生修士課程在籍（1983 年－1985 年）。2013 年 3 月 31 日から 台北駐福岡経済文化辦事處處長（総領事）。大の親日家・愛日家として知られ、自ら「えびす・よしとし」と名乗る。九州と台湾の絆を深める活動に積極的に取り組まれた。



—昨年 2 月 1 日に熊本熊本大学で行われた平井数馬先生顕彰会では「台湾に残された日本文化」、本年 2 月 25 日に益城町文化会館で行われた「志賀哲太郎先生顕彰のつどい」では、「日本精神から見た志賀哲太郎と台湾」と題して講演され、参加者に深い感銘を与えた。

本年 7 月に御退官。在職中は、毎年、九州各県を精力的に訪問され、熊本にも毎年 50 回以上足を運ばれた。

■「大甲の聖人」志賀哲太郎が結ぶ台中と熊本の縁

臺灣新聞特約記者 野藤泰昇（のとう やすのり）

台中市北西部の街、大甲で小学校の代用教員として半生をささげ「大甲の聖人」と敬われる志賀哲太郎(1865～1924)を讃え、その功績を広く知ってもらうための講演と日台友好交流会が、哲太郎の出身地である熊本県益城町で2月24日、25日の両日に渡って開催された。(共催：益城町、益城町教育委員会、志賀哲太郎顕彰会、後援：熊本県、台北駐福岡経済文化辦事處ほか)

日本統治下の台湾における業績が讃えられる日本人として、烏山頭ダムと16,000kmにわたる水路(嘉南大圳)を完成させ嘉南平野一帯を大穀倉地に変えた八田與一を始め、近年、多くの人々が挙げられるようになったが、志賀哲太郎の名前は全くと言ってよいほど、知られていなかった。

志賀哲太郎の名前を初めて全国区で取り上げたのは、熊本県選出の衆議院議員・木原 稔氏。同氏が在野時代の2012年5月に台湾を訪問したとき、台中市大甲区にある「文昌廟」に「聖人(神様)」として祀られている日本人がいることを聞いて駆け付けたところ、奇しくもそれが熊本県益城町出身の志賀哲太郎だとわかったという。



平成24(2012)年に「日本文化チャンネル桜」で志賀哲太郎を紹介した木原稔氏

帰国後そのことを木原氏自身のホームページに掲載したり、「日本文化チャンネル桜」の鼎談で紹介したことで地元の人々が広く知るところとなり、教育関係者の呼びかけで熊本県、益城町など行政も応援した志賀哲太郎顕彰会が2015年9月に組織された。今では顧問を含む会員数が50人を超え、毎月の定例会、年間1～2回の研修会(100人規模)、年間10回程度のミニ研修会(10～50人規模)を通じて、会誌発行、パネル展示など、活発な活動を繰り広げている。

平成29(2017)年12月に顕彰会が発行した「志賀哲太郎 資料集」の序文で台中市大甲区の劉来旺区長は次のように述べている。(一部略)

志賀哲太郎先生が大甲で亡くなられて(1924年)、すでに一世紀近くになります。

私は大甲区公所の区長となって以来、伝統先例に則り、毎年清明節の前には幹部職員を引き連れて鉄砧山南麓の「貞節孀(大甲三神の一神)」と「志賀哲太郎先生」の二つのお墓に詣でて参りました。前者は150年前3度雨の恵みをもたらし、戦争の度に戦火から大甲の街を守って来ました。大甲の街の人々はその遺跡に詣で、言うようにひざまづき、額づいてお礼を言います。その御利益は天より高いものです。

後者の志賀哲太郎先生は日本人で、大甲の代用教員となられ、「真善美」を尊ぶ精神で大甲の子供達を教育されました。先生が亡くなられた後も、千人以上の教え子達が後の世も何世代にもわたってお墓に参拝し、敬意を表しています。鎮(町)長も代々、お墓に詣でて敬意を表します。

文献によれば、志賀先生は元々高学歴の知識人で、新聞記者となり、積極的に政治活動をしておられました。しかし、先生は政治が騙し合いのようなものだと看破され、故郷に帰られます。

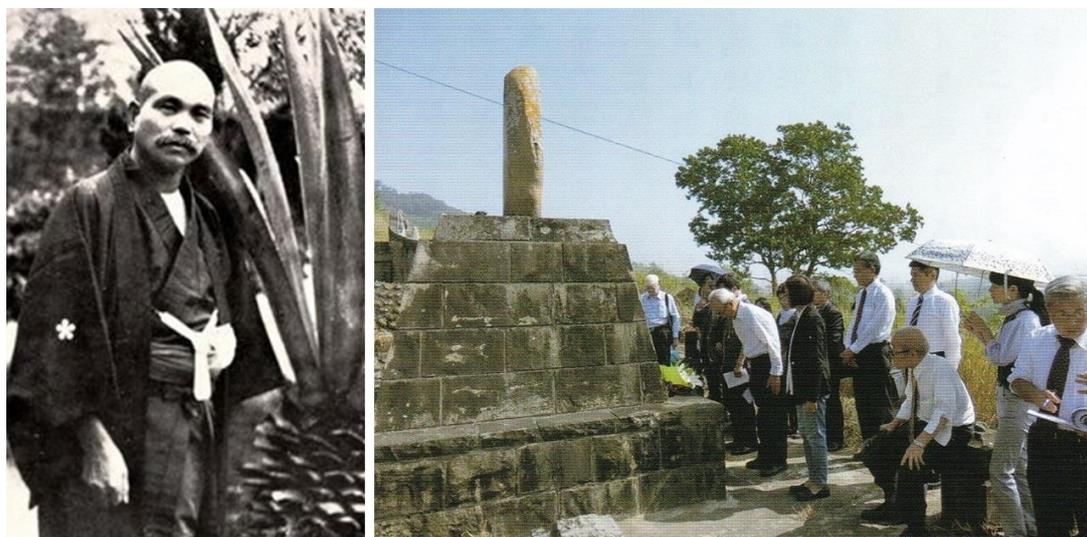
そして子供を教育育てる教師になることを志しますが、思い通りに事が運ばず、台湾が日本に割譲された後の台湾への移民ブームの影響もあって、ついに当地台湾に移り住み、創設されたば

かりの大甲公学校に赴任され、開校当初の教師となられたのでした。志賀先生は開校以来何年間も、就学適齢期の未就学児童がいると分かると、その家庭をまめに訪問され、読書を奨励し、貧しい者があれば金銭を提供して勉学を補助しました。それは先生の人並み外れた品格の表れでした。

日本人は礼節を大事にする民族です。志賀先生は特に礼節を重んじる人でした。子供達が面白がって四方八方から一人一人お辞儀をすると、志賀先生もその度に返礼をします。子供達が見て大笑いすると、志賀先生も一緒になって大笑いします。それは祖父と孫の無邪気な遊びのようでした。そこに見られるのは「純真なる度量」とも言うべきものでした。

志賀先生は、国家統治のためには被統治国家の人々を大切にしなければならないと思っていましたが、それは権力者にとっては受け止めがたいことでした。あるとき、学生達が互いに語り合っただけで授業をボイコットして退学させられる事件がありました。志賀先生は学生達を罰することのないよう学校側に要請しました。そして終に、先生は死を以て諫めます。当事者ばかりでなく、大甲の名だたる人達、学童やその親達までもが驚きおののきました。数キロメートルにも及んだ長い会葬の列は、志賀先生の「この上なく美しい精神」を偲ばせるものでした。

台湾大甲の歴史において、かつて、幾千幾万人もの人々がこの地に生活し、記憶を留めて来ました。勿論いいときもあれば悪いときもありました。そんな長い歴史において「貞節孀」と「志賀哲太郎」の二人の偉人は、「伝記」や古跡が示すとおり、永く大甲の人々を見守ってくれました。このお二人の事績は大甲の人々の心の奥深く刻み込まれ、何代も後の世まで語り伝えられていくことでしょう。



愛情をもって子供に接した哲太郎と、今もお詣りの人が絶えない墓所
(澤安保生、第八期 2018 年 1 月より)

「日本精神から見た志賀哲太郎と台湾」と題して 2 月 25 日に 400 人の聴衆を前に益城町文化会館ホールで講演した台北駐福岡経済文化辦事處の戎義俊處長（総領事）は、夏目漱石の「夫し教育ハ建国ノ基礎ニシテ、師弟ノ和熟ハ育英ノ大本タリ」という言葉と「十年樹木、百年樹人」（樹木を育てるには 10 年、人を育てるには百年かかる）という台湾の諺を紹介した。そして国づくりの根幹である教育において、哲太郎が知識の伝授だけでなく“礼儀”や“時間の観念”など自らが身をもって範を示したこと。「勇気」「忠誠」「勤勉」「奉公」「自己犠牲」「責任感」「遵法」「清潔」といった日本精神をもって住民と暮らしたこと。日本人も台湾人もお互いに尊敬し友情を深めるべきとして「人権尊重」「公平無私」の態度で献身的に初等教育に取り組んだこと。その

結果、26年間で1000人余りの台湾学生を教え、台湾各界に多大な貢献を残したこと。などを高く評価した大甲区役所が哲太郎を2011（平成23）年12月に「文昌廟(学問の神様=文昌君)が祀られている場所に入れることを決めたと述べた。

また、「縁は異なるもの味なもの」という言葉を引き、人と人、町と町、国と国というものも、何か一つのきっかけによって上手く結ばれるものであるが、大甲と益城町が志賀哲太郎の縁で120年も前から繋がっていることに目に見えない何かを感じざるを得ないと述べ、今回の交流にわざわざ大甲区から参加された王澤佳副区長をはじめとする10名の台湾関係者、顕彰会の方々、参加者の方々の力で台中・大甲区と熊本県・益城町の縁がさらに深まり、教育や文化を軸とした交流を通して友好関係を育むことを祈念すると述べて講演を結んだ。



戎義俊総領事の講演
（平成30年2月25日 益城町文化会館）

講演会の後、30分以上かけて哲太郎の一生を熱弁する 寿咲亜似氏の胸を打つ語りがあり、戎、寿咲両氏の話の余韻をそのままに参加者の殆どが、交流会の会場へ移り、大甲区からのお客様と親しく懇談して全日程を終えた。



哲太郎の一生を熱く語った寿咲亜似氏



交流会で挨拶する大甲区の王澤佳副区長



懇談風景－1



懇談風景－2



懇談風景－3

■ 「志賀哲太郎小傳」 抜粋

本会発行物編集部会長 松野陽子（益城町文化財保護委員）

本会が志賀哲太郎先生の顕彰を行うに当たって、私がおの主筆を担当し今春出版した伝記「志賀哲太郎小傳」は、それまでの志賀先生に関する唯一の伝記である「志賀哲太郎傳」（桑野豊助著・昭和49年刊行）をもとに、本会による新たな調査の成果等を踏まえ、若年層から高齢者層まで幅広く一般の人々にも読みやすいものになることを心掛けて、編集したものです。

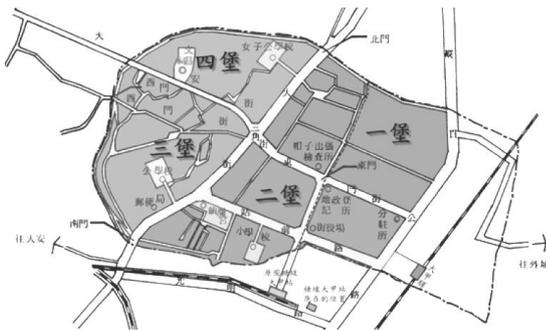
会誌1号・2号でその抜粋をお示したところですが、今回、会誌3号においても、志賀先生のお人柄や生き方がよく表れている部分をお読みいただくこととしました。

〔九 大甲街と鐵砧山 から〕

哲太郎が不思議な縁で住みつくことになった大甲街は、台湾中部の要衝であり、大陸、特にアモイ、マカオからの戎克船(ジャンク)の往来がしきりであった。戎克船は帆をはらませて緑の鉄砧山を目指して大安港に船を着け、大甲城に入り、北は新竹、南下して彰化、員林、東は台中城に入り商売を行っていたもので、大甲街は台湾中部における商売の街であると共に、行政の中心でもあった。

大甲街は、北は雪山(次高山)、大雪山を源流とする大安溪、南は合歡山を源流とする大甲溪、北はなだらかな緑の鉄砧山、南は水美山の間に挟まれ、洪水に襲われることがしばしばであった。街は東西南北の四つの門があり、城壁を巡らしていた。

汽車は一九二〇(大正九)年、電灯は一九一六(大正五)年頃にやっとついたが、それまで夜はカンテラを使っていた。城内は十字路を中心に、西南に教育発祥地の文昌廟(ぶんしょうびょう)、東南に媽祖廟(まそびょう)があり、住民は福建省から来た人が大部分で、五%位が広東省の人であった。人情味厚く、自由を尊ぶ商人肌の人が多く、住み良い街で、大甲帽、大甲蓆(むしろ)の輸出が盛んであった。留学や外国へ進出する人、華僑や豪商も多かった。



統治時代の鉄砧山地図

哲太郎着任の一八九九(明治三十二)年頃、大甲の人口は外埔(がいほ)、内埔(ないほ)、大安、日南の各庄を加えても七、八千人程度であった。管内は、水田面積千五百甲(町歩)で、水稻と大甲帽・大甲蓆の原料である三角蘭草が栽培され、畑には野菜の外に甘蔗と鳳梨などが栽培された。山林には風が強いため巨木がなく、相思樹が防風林の替わりをなしていた。

交通は、陸路は不便であったが、一九〇七(明治四十)年縦貫鉄道の山線が開通。大甲から十二キロの外埔庄線の后里駅開設により、大甲街の交通の便は開け、更に海岸線の開通により大甲駅が開設された。

大甲名所として島内に大きくクローズアップされているのが鉄砧山(てっちんざん)である。同山は大甲鎮から東北方向へ二キロ、歩行二十分、西に台湾海峡を望み、東北方向に雪山(次高山)、東方に合歡山、南に玉山(新高山)と全島中最も眺望が美しい所である。山上には豪壮な鄭成功(ていせいこう)の廟があり、延平郡王の石造、廟所などもある。中腹には鄭成功の遺徳を讃える伝説の剣井があり滾々(こんこん)と清水が湧き出ている。



当時の鉄砧山遠望

この鉄砧山南麓に志賀哲太郎の墓がある。(注：剣井とは、鄭成功が北伐で駐屯した際、剣を山

に突き刺したところ、甘美な泉が湧いたという伝説のある湧水。)

[十 文昌廟時代 から]

(時間と礼儀)

哲太郎の日課は、朝五時に起き、いかに寒い日でも必ず水を浴びる。それから東の空に向かって祖国の安泰を祈り、勉強をし、朝食後は着物に袴、冬は梅鉢紋の羽織を着て、中折帽を冠って、二キロばかり離れた駅まで歩いて行き、駅の時計と自分の時計(ウオルサム時計)の時刻を合わせ、学校に着くと、学校の時計を合わせた。駅が無かった頃は郵便局の時計に合わせしていた。



文昌廟西側の住居

大甲駅が出来、汽車が通じるまで、大甲街民の時間の観念はルーズで、二十分や三十分遅れることは当たり前で、一時間や二時間遅れても平気で、太陽の具合を見て時間の判断をしていた位であった。彼はこの悪癖(あくへき)を矯正しようとの思いから、時間には厳しく、生徒の遅刻には罰を与えた。学校に鐘を備えたのも彼の発案で、学校の鐘がカンカン鳴ることによって時の観念を与えた。哲太郎はこの習慣を通し二十六年間無遅刻、無欠勤であった。彼は、身をもって範を示し、それを継続するという究極の教育を行ったのである。これは教師の在るべき姿として最も大切なことであろう。

彼は礼儀正しく「志賀仔有礼儀」(志賀先生は礼儀正しい)と敬われた。媽祖廟(まそびょう)前の広場には百余年を経た榕樹が茂っており、その下で朝早くから杏仁(あんじん)茶の屋台店が出ていた。早起きした子どもが茶碗を両手に持って美味しそうに飲んでいて、朝の早い哲太郎を見て「志賀先生だ、志賀先生だ」と友達に知らせ、寄ってきてお辞儀をする。彼は中折帽をとって「おはよう」と答礼をする。子どもはスタスタ歩くと哲太郎を追い越して、又立ち止まってお辞儀する。そして「先生に挨拶ができた」といって飛び跳(は)ねて大喜びし、子どもたちは幾度となくこれを繰り返すが、彼は「うるさい」と言ったことがない。毎朝のようにこのようなほほ笑ましい光景が続いた。生徒にも街の子どもたちにも親しまれた哲太郎の一面である。子どもたちだけでなく、親たちともよくつき合った。

(台湾の人々に寄り添う)

大甲公学校は大甲街のみならず、大安、日南、外埔(がいほ)、内埔(ないほ)の四堡からも生徒が来ていたので、哲太郎は、城内の親たちは勿論、これら四堡の親たちからも、結婚やお祭りによく招待された。これに対して、お祝い品を持参して遠路でもよく出かけ、街民と共に飲み心から歓談した。



大甲の町並み 明治38年当時

(三つの宝)

自身の日常生活は、禅僧の如く厳しいものであったが、決して窮屈ではなく、親たちや街民とはよく親しみ、よく飲み、よく語った。夕飯時には毎晩、台湾産の紹興酒(しょうこうしゅ)を欠かさなかった。あとは読書、それから座禅と規則正しい日課であった。酒と共に釣りを好み、教え子とともに大安溪でよく釣りを楽しんだ。

大甲には、上野齋をはじめ熊本県人が多かった。熊本県人であった関係上、警察や公所にも熊本の人があり、彼もやり易かったようで、熊本の人と会うと熊本弁で語り、飲み合った。哲太郎の日頃の晩酌は一〜二合程度であったが、客と飲むと斗酒なお辞せずという方であった。しかし醜態を

見せたことは一度も無く、教え子の家へ招かれ飲まされたあとも、三里の道を素面同様に蠟燭提灯(ろうそくちょうちん)片手に歩いて帰った。

哲太郎は常日頃から修養を怠らず、書齋には王陽明の「破山中賊易、破心中賊難」の漢詩を自書し座右の銘として掲げ、一日三省し励みとしていた。これは「山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難(かた)し」と読み、山賊を討ち果たすことはやさしいが、心の中の賊、私心を捨て去ることはむずかしいという意味の格言である。

教え子には「自分は三つの宝を持っている。一つは慈悲、二は儉約、三は謙遜である、だからいつも心は平穩無事だ」と言っていた。事実、彼が怒ったことを見た人はいない。故に聖人のようだと言われるようになった一つの理由である。この三つの宝とは、老子の「三宝」、即ち「我に三宝あり持してこれを保つ。一に曰く慈 二に曰く儉 三に曰く敢えて天下の先を為さず・・・」である。

[十一 三堡校舎時代 から]

(新校長着任と軋轢)

後任の岡村正巳校長は、前任者と違い、金筋、帯剣の判任官姿で、先生たちはもちろん、生徒たちも親たちも馴染まず、白眼視した。新校長は、哲太郎に対する教員たちの厚い信任と生徒たちの思慕を嫉妬し、何とかしてそれを壊そうとした。最初は自分の自慢をしたが効果なく、哲太郎の悪宣伝をしたが耳を貸す者が無かった。そこで校長は陰湿な方法でことごとくに彼に嫌がらせを行った。しかし、周囲の人々は哲太郎に心服しており、慈父の如く慕う生徒たちの前に手の施し方がなかった。

教え子が大きくなり、社会的に活躍し出すと警察と衝突することが多くなり、街民に罪は無くとも、警察が理不尽にも何やかやと理由をつけて引っ張って行こうとする。憤懣(ふんまん)やるかたない人々が彼のところへ訴えに来ると「衝突はしても良い。警察に間違いがあれば指摘しなさい。しかし怪我をしては馬鹿らしいから気をつけなさい」と諭(さと)した。そして、見過ごしできぬ場合には自ら警察に出向いて取りなしをした。哲太郎はあくまでも民衆の味方であり、日本人も台湾人も同一と見る、公平で慈悲の心豊かな人であった。哲太郎は故郷熊本において、宮崎滔天とも交わりを結び、同氏から教えられた孫文の三民主義、大アジア主義に則(の)つとり、台湾の子弟を教育した。常に、日台は同種同体であると口にし、官憲の圧力に屈せず、台湾人の味方となり、三民主義の達成に力を尽くしたのである。その教えは教え子たちの胸に浸(しみ)み込んでいった。



三堡校舎



大甲公学校(昭和3年頃)

このような状況から、哲太郎には当然の如く、官憲に阿(おもね)る新校長を始め各方面から圧力がかかったが、日本人との間の意志疎通の変化や障害を乗り越えて、ひたすら台湾人子弟の味方として終始した。人間として伸び伸びと教え子を導き、その天分を伸ばし、慈父の情をもってその薫育(くんいく)に当たった。哲太郎は、次の時代の台湾人を養成せんとするの主旨を貫かんと、全精魂を打ち込んだ。

[十二 民族運動 から]

台湾解放の先頭を切った林献堂の郷里霧峯や、解放運動の先鞭をつけた台中市が大甲街に近いので、その解放運動はいち早く大甲街に流れ込んでいった。大甲の青年有志は林献堂の提唱する台湾解放、民族運動に賛同し「六三法撤廃期成同盟」に参加し、その動きは「台湾議会設置請願運動」「台湾文化協会」へと発展拡大していった。

これら一連の運動により、静かだった大甲の街にも政情穏やかならざるものが生じた。大甲公学校においても、生徒は年少であるが、その親たちで哲太郎の教え子であった大甲街の青壮年の多くと、元大甲公学校教師の黄清波・陳嘉邦たちが文化協会に入り、また現職教師らもこれに同調した。大甲の青年たちも「台湾民報」をむさぼり読み、民族解放を叫んだ。

哲太郎はこの情勢を静観していた。往年郷里熊本において戦われた自由民権の確立運動に比べ、台湾での運動は、民族解放という深刻かつ重大な民族活動であることが、彼にとってはより深い苦悩となった。永年台湾に住み、台湾人の味方となり、慈父として親しみ、台湾人を最もよく理解していた彼は、心理的にはその先頭に立って、民族解放の叫びをあげ、演壇に上がって往年の雄弁を振るいたいところであったが、雇員といえども自らは総督府の一官吏であり、官から俸給をもらっている身ではそれも叶わず、悩みは深かったが、黙して語ることを避けざるを得なかった。そのような中で運動は拡がるばかりであった。



林献堂

[十四 建碑 から]

哲太郎葬儀の翌々は正月、その夜、学校では恒例の新年の名刺交換会と祝賀会があり、有力者が集まったが、話題は志賀哲太郎の事に集中し、祝賀会としてはしめやかな会となってしまった。岡村校長が慣例に従って挨拶を述べると、校長の永年にわたる哲太郎への仕打ちを知る教え子たちは、込み上げてくる怒りを、元日ゆえとじっと我慢をしていた。そのとき呉准水が遅れて現れた。彼は大甲の大地主であり、人望が厚く、文化協会の指導者の一人であり、誰もが一目おく有力者であった。会場に緊張が走り、中央テーブルに着座していた警察署長や校長などが皆立ち上がり席を譲った。

呉准水は隣のテーブルに着き、中央テーブルにだけ日本酒が振る舞われているのを知るや、校長に近づき大声で「新年の宴会で日本人だけ日本酒を飲むのはおかしい。我々も日本酒を飲む」と怒鳴った。校長があたふたと立ち上がって説明しようとする、呉は「ばかやろう」と叫び、コップの酒を校長の顔に浴びせたのである。全員が立ち上がり、会場は殺気立った。その後、校長はじめ日本人は気まずい思いで早目に帰った。後には台湾人だけが残し、盃を掲げて「痛快だ」と大声で叫んだ。教え子たちは寄り合って哲太郎の遺徳を偲び、盛大な葬儀のことや建碑のことを話し合った。墓は仮埋葬で墓標は杉の角材だった。

四十九日の七七忌が行われた時、建碑のことが決まり建設委員会が設立され、街(市)長李進興を主任委員に建設案を発表。その間に台幣五千元(注：現在の二千五百万円程度)の資金が集まった。墓域を鄭成功ゆかりの鉄砧山に定めたが、同地は浄地で墓の建設を許されなかった。しかし、当時の大甲郡警察課大甲分室主任菅野政衛警部の特別な計らいで許可を得た。墓碑建立の際、同警部は苦力と一緒に、鍬を取って整地に当たった。後に警部が、昭和五年の霧社事件の際、頭目の息子の刃(やいば)の犠牲になったことは痛ましい限りである。

墓は教え子で神戸の貿易商、柯清標が日本各地を見て廻り、建墓の参考とした。工事は大甲在住の教え子で工業学校建築科出身の呉金土に一任したが、教え子たちからそれぞれ意見や要求が出て三回もやり直すこととなった。場所は鉄砧山の南麓、前面に美人山一帯の山脈、西に台湾海峡の滔々

たる白波を眺める好位置にあり、堂々たる姿を呈している。竣工式は一九二六(大正十五)年十月三十日であった。

戦後、台北に初めて日本大使館が設けられ、大使館は、国民政府の外交部に依頼して、日本人の墓を一か所に集めて供養するという指令が各街町役場に通達された。大甲の役場では、五千元の予算を組み、志賀哲太郎の墓も含め日本人墓を取り壊し、骨を指定場所に集める計画であった。普通なら、あれだけ心を尽くしたのだから、心残りはないはずだ、日本人だから日本大使館に任せたらいいだろう位でけりがつき、墓は暴かれ、普通の人と一緒に供養されたのであろうが、志賀哲太郎の教え子は違った。協議の上、日本大使館に代表を出して「先生の墓は動かさないで欲しい」と嘆願した。「この墓は日本人の墓に違いないが、我々の恩師で、墓は我々が建立したものだ。我々が尊敬する志賀先生の墓は動かさないでほしい」という願いである。これを聞いた日本大使館では「我々の真意は誰も供養する人がないのを憂慮してのことであって、そんなに日本人の墓を大切にしてくれるとは、大使館としても有難い」ということで、哲太郎のお墓は壊すこと無く、島村ソデの墓碑とともにそのまま鉄砧山の麓に残ることが出来、教え子たちもほっと胸をなで下ろした。

哲太郎の墓は教え子の誠意により常に清掃され洗石されて鉄砧山麓に光彩を放っている。墓碑の表面に「志賀先生之墓」と刻まれ、裏面に墓碑銘が次のように刻まれている。

「墓 碑 銘」

姓は志賀、名は哲太郎、慶応二年(注：戸籍上は元年)八月二十八日生まれ、日本国熊本県上益城郡津森村(現益城町田原)の人なり。幼い時から学を好み、大きくなってからは気節(注：男気と節操)を生じるようになり、僅か十八歳で、同県の神水義塾で中西、八淵、藤岡諸賢人と仏学の宣伝に努めた。三年後紫溟会に入会し、国権党员となった。

日本憲法の発布に引き続き、議会招集を見るや先生は再び佐々、紫藤、古荘諸名士と交わり、東都と郷里の間に記者として重んぜられた。二十九歳の時、政界を去り、同県の原水小学校の教壇に立ち、更に大原義塾の発展に労力した。明治二十九年十二月、三十歳の時台湾に渡り、四年間商業に従事した。のち家永苗栗県知事の知るところとなり、明治三十二年二月、大甲公学校に招聘さる。以後二十六年間在職。先生は徳育を重んじ、知育、体育を次とす。当時は占領間もなくにして、台湾の父老は学校の貴さを知らず、されば先生は労を辞せず、生徒を勧誘し、登校を怠る者あれば、その家まで訪ね、手を尽くすこと出席するまで止めなかった。従って成績は上がり、他校を抜き出て、内外の注目するところとなった。総督府はその富行に鑑み、任官を計ったが、そのたびに先生はこれを拒否された。それは大甲の土地柄が美しく、情厚く、子弟を教えるに値するからであり、且つ自分は独身で家庭の煩いがなく、転勤することは忍びないからであった。そのため終身昇官は断った。

当時、台湾は各界にわたり民族の差別が甚だしく教育界も然りであった。しかし、先生はその中に在って、常に平等に人に接し、差別は少しもなかった。自らは儉約し、謙遜し、他人を慈しみ、その功を自らのものにしようとはしなかった。

先生はいつも三つの宝があると言っておられた。一つは慈悲、二つは儉約、三つは出しゃばらないことであった。

大正十三年過労のため病臥し、遂に十二月二十九日永眠された。年は六十歳、大甲民は痛惜してやまなかった。門下生が寄付金を集め、先生の遺志通り、鉄砧山麓に厚く葬ることにした。遠近から千余名の門弟が集まり、声をあげて泣き、声が出ないまで泣いた。沿道においては靈柩を見送る人までが皆泣いて別れを告げた。



志賀先生の墓

先生は高位顕職の人ではなかった。金を使って人に影響を与えた人でもなかったが、こんなにも多くの人から敬慕され、悲しまれることは偉大なりという外はない。 ああ、悲しいかな。

大正十五年十二月三十日
伊藤 賢道 撰 ・ 鄭 虚一 書

(注：伊藤賢道は文学士・台北国語学校教諭。鄭虚一は新竹市在住の漢学者・書道家。)

(注： 哲太郎が亡くなった当初、教え子たちは彼の名誉のために弔辞等で「病死」としている。)

[十五 生誕百年祭 から]

志賀哲太郎が他界して五十余年。その教え子たちも、老いを迎え多くの者が亡くなった。生存していた教え子の八十歳に近い老翁たちは、哲太郎が生きとし生ける日の如く、在りし日を偲び、その徳を讃えた。これは、哲太郎の二十六年間の薫育がいかに偉大なものであったかを表している。

志賀先生生誕百年祭は、生誕の八月二十八日より一ヵ月後の、昭和四十一年（民国五十五年）九月二十八日の教師節に墓前にて挙行された。大甲在住の教え子は勿論、島内、東京、神戸、熊本その他の教え子百余名が参集し、墓前祭と追悼の宴を行った。その際、記念碑の建設と伝記の編纂、映画化等が決議された。

記念碑の碑文は、孫逸仙の第二子で台湾総督府の要職にあった孫科に依頼し、土地は、哲太郎の墓碑の傍らに選定した。教え子の長老たちも寄る年波を勘案し、生きているうちに実現しようと度々協議を重ね、呉淮水が先達となって教え子を取りまとめ、「志賀哲太郎顕彰会」設立の議を進めた。幸いにして熊本在住の紀伊進氏、台北在住の福本敬介氏が大甲在住の教え子と連絡を取り、神戸その他各地の教え子たちも進んで賛同し、五十年祭と伝記の編集出版、記念碑の建立が実現した。

記念碑建立から数年後、大雨の影響で山腹に地滑りが起き、墓や記念碑が埋もれてしまったことがあった。教え子たちは、土砂を取り除き復旧した。さらに、李燕山は、李家一族の墓を哲太郎の墓のすぐ上の山腹に建て、哲太郎の墓を守る防壁にした。

哲太郎の墓を守るように、周囲には教え子たちの墓が多い。現在も、墓や記念碑の上方はコンクリート壁で固められ、しっかりと防護されている。



志賀哲太郎先生生誕 100 年墓前祭(昭和 41 年)

[十六 大甲の墓 から]

鉄砧山中腹に誇らしげに建つ哲太郎の墓は、教え子たちが維持管理をした。命日には学校の代表が参拝し、教え子たちは清明節には花や香華を手向け哲太郎に感謝と冥福を祈り、遠方から故郷大甲に帰省する教え子も、哲太郎の墓に参るのを例としていたが、今ではその教え子たちも他界してしまった。

哲太郎が他界して九十余年、墓域は常に清掃され、墓石は台湾式に洗われて清々しい姿を見せており、傍らに島村ソデの墓が慎ましく並び立ち、隣には、教え子の中でも台湾文化界で大成した呉淮水らの呉家の豪華な墓、哲太郎の親友の黄並伝の愛酒塚、更に親しき友の墓々に囲まれて永遠の眠りについている。

哲太郎が亡くなって十四年後、肝胆相照らした若き金子政吉校長も、総統府の指導と生徒・住民の間(はざま)で懊悩し病に倒れ、還暦を待たずして哲太郎と命日を同じくするかの如く亡くなった。金子校長と哲太郎、二人の大甲公学校創設期の教育者としての喜びは、この二人以上に教え子たちが知っている。大甲の住民は今も鉄砧山の墓所に感謝の香華を捧げている。



島村ソデの墓

[十八 文昌廟に祀られる から]

二〇一一年十二月三十日大甲区役所は、日本統治時代「大甲の聖人」といわれた日本人教師志賀哲太郎先生を「文昌廟」に入れることを決めた。蔡信豊大甲区長は「志賀先生がかって大甲公学校で二十六年間、千人以上の台湾学生を教え、多大な貢献をしたので、彼を文昌廟に入れる」と発表した。

哲太郎が、かって住んでいた文昌廟西隣の一室は「志賀哲太郎記念室」として、肖像や本などが展示されている。毎年四月の清明節の時期に、大甲区役所により志賀哲太郎の墓の清掃・祈願が行なわれている。



文昌廟 志賀先生の書斎

[十九 熊本の墓 から]

昭和六十(一九八五)年当時、志賀家の墓地について、田原在住の坂本達(いたる)氏(故人)は、同人誌「舩船(もやいぶね)」に次のように記している。

『益城町は、益城という風土の中に隠れた志賀哲太郎という一庶民の生き方を、今後顕彰すべき「志士」の一人として挙げている。』

私は、以前、志賀哲太郎と記した墓が田原字水洗の山林内にあることを津森の古老から聞いたことがある。その記憶を辿り墓地を探訪した。昔からの山道は見当らず、行く手を阻む雑木雑草の茂みを押し分けて墓石を探し当てた。墓石は竹やぶに覆われ荒れ放題の状態であった。以前この墓地一帯にあった他家の墓石は既に改葬移転しており、この時志賀家の三基の墓石のみが残っていた。一基は「志賀哲太郎墓」と刻せるもの、他の二基は、志賀先生が建立された父「甚三郎」(明治廿二年旧丑十二月廿五日歿、享年五十七)と母「ジュカ」(明治三十七年旧六月二日歿、享年六十二才)

の墓石であった。

志賀先生の墓は、昭和十年八月、先生の親戚に当たる津森の上小谷・澤田金平氏（戸籍名「金蔵」故人）の建立せしもので、墓石の裏面に

「氏ハ幼ニシテ学ヲ好ミ家事ノ傍ラ独学後飽託郡健軍村中西氏ノ塾ニ入漢学ヲナス佛教雑誌国教発行サレルヤ中西氏ト共ニ編輯ニ従事ス其後渡台ヲ志シ台中県大甲公学校ニ教鞭トルコト廿五ヶ年間実ニ其ノ績大ナリ大正十四年十二月廿九日享年五十九才ヲ以テ病死ス学校側及ビ子弟相謀リ氏ノ功ニ酬ユルタメ墓地新高山ノ麓ニ記念碑ヲ建設ス此ノ墓地ニ其ノ遺骨ヲ分納シタルモノナリ」

と記されていた。今はこの墓地を訪れる人もなく、墓石三基は、親子寄り添ってひっそりと眠っていた。墓石の調べを終え、墓の清掃を行い墓地を離れた。

この後、私は、志賀先生の生誕地に足を運んだが、志賀家跡既になく、土地の古老たちに尋ねても誰一人往時を知る者はなかった。幾星霜を経た現在、人も住家も変わり、志賀家を偲ぶ物は何ら見当たらなかった。現在は地主の中村家が畑地として志賀家跡地を耕している。時折、鍛冶屋の名残か鉄片が出土するくらいである。

一生を独身で過ごされた志賀先生には遺族も居らず、古里に哲太郎の妹の縁故者があるが、その記憶も定かでない。生誕の地における資料は、過去帳（浄信寺）及び戸籍簿（役場）位である。』（「舩船」故坂本達氏（ベトナム難民収容所益城古城園長）の文を引用）

哲太郎には二人の妹がいた。長女ミノは明治二十三（一八九九）年一月二十三日に澤田金蔵と結婚して津森の小谷に住んだ。哲太郎が亡くなった翌年、島村ソデが哲太郎の遺品を届けている。澤田家には今も、印鑑と着物が保管されている。

ミノの長男の光男（哲太郎の甥）には、折にふれて沢山の書籍を台湾から送っている。当時、書籍は高価で貴重なものであったので、光男は友人たちに呼びかけ「輪読会」を行った。その青年たちはやがて村（旧津森村）の指導者となり活躍した。

光男はのちに朝鮮にわたり満鉄で朝鮮各地の駅に勤務するが、平壤（現ピョンヤン）駅助役のとき、三男寛旨誕生の四十日後、昭和四（一九二九）年三月十四日、三十五歳の若さで他界する。寛旨は祖母ミノから大伯父哲太郎の話の間かされて育ち、教育者となった。

哲太郎の母ジュカは長女ミノに見守られ、明治三十七（一九〇四）年七月十四日に六十二歳で亡くなった。大津に嫁いだ次女エジュは、度々ミノの家を訪れ、両親や兄の思い出を語り合ったという。

両親と哲太郎の墓は津森村田原にあったが、村の墓地が整理されて浄信寺の納骨堂に祀られることとなり、志賀家は澤田家の納骨堂に祀られた。ミノの孫の澤田寛旨は、平成二（一九九〇）年、それを熊本市桃尾墓園に移した。澤田家の墓と並んで志賀家の墓が建てられている。

墓石の横の顕彰碑には、澤田寛旨により、

「『大甲の聖人志賀哲太郎』 慶応元年津森で出生。資性温賢向学の志に富み、神水義塾、明治法律学校に学び、九州日日新聞の記者として活躍。のち期するところあり渡台、大甲公学校で二十六年間台湾人の教育に献身。大正十三年没現在も大甲人の尊敬を集める。」

と記されている。

平成二十八（二〇一八）年四月十四・十六日の熊本地震で墓石や顕彰碑も破損したが、澤田家により耐震工事を行い修復された。現在、志賀家の墓は、遺族の澤田家によって大切に守られている。

※ 詳細については、別途刊行の「志賀哲太郎小傳」をお読み頂きたい。

■ 台湾教育に尽力した熊本の教師たち

松岡 明先生と 26 人の教え子たちの海を越えた温かい絆

本会事務局 折田豊生

平成 30 年 8 月 21 日の産経新聞（産経抄）に、かつて台湾台南州（現台南市）で教鞭を執った熊本出身の教師と 26 人の教え子たちが、戦後 23 年間にわたって心温まる交流を続け、まごころのこもった多くの書簡が遺されていたことが判明し、御子息が、これを何とか日台の友好交流に活用できないかとの思いを胸に、台北駐福岡経済文化弁事処の協力のもとで取組みを進めているとの記事が掲載された。

その教師は松岡明先生、御子息は松岡忠明さん（熊本県在住）である。

忠明さんは、平成 3 年に 86 歳で亡くなられた父親の遺品を整理しているとき、160 通もの手紙やはがきを発見。目を通してみると、そこには、父明さんの台湾における教師生活を彷彿とさせる教え子たちの心の込められた言葉が連綿と綴られており、とても処分することなどできなくなったという。

松岡一家は、昭和 21 年に日本に引き揚げてきたが、それから 20 年近く経った頃、教え子の一人が、偶々、明さんの本籍地が書かれたメモを見つけて手紙を出したところ、郵便局の機転により、その手紙が懐かしき恩師、明さんの手許に届くこととなったとのこと。これをきっかけにして、我も我もと教え子たちの恩師への便りの輪は広がり、海を越えた交流が長年続けられていったようだ。

この強く温かい絆を育んだ松岡明さんは、いったいどのような教師だったのか。

松岡明さんは、明治 39 年 9 月 6 日、菊池郡田島村（現菊池市泗水町）で誕生。大正 15 年、熊本第二師範学校を卒業後、菊池郡の豊岡尋常小学校、豊岡農業補習学校に勤務した後、昭和 4 年 5 月に渡台。台南州の塩水尋常高等小学校、新栄尋常高等小学校、烏樹林尋常小学校及び麻豆公学校の訓導を務めた後、麻豆北国民学校教頭を経て、昭和 18 年、六甲国民学校校長に任ぜられた。

御子息忠明さんによれば、明さんは、若い頃から内村鑑三に惹かれ、その思想に大きな影響を受けていたであろうという。

内村鑑三は、キリスト教思想家、文学者、伝道者及び聖書学者として知られており、無教会主義を唱え、形式よりも実質を重んじた信仰者だった。英語で書かれた著書「代表的日本人」は世界的なベストセラーであり、各国の指導者たちが座右の書とした名著だった。

明さんが内村鑑三の思想の影響を受けていたということだけでも、その教育におけるスタンスがどのようなものであったか十分に推察されるのであるが、教え子たちの手紙の文面からもその面影を偲ぶことができる。

台南県塩水鎮（現台南市塩水区）の教え子、葉〇〇さん（歯科医）の昭和 59 年 9 月 28 日消印の手紙の一節には、次のようなくだりがある。

「人生の第一歩の教育を先生に受け、私の一生の一番大事な人生行路の指針を授けて下さいました先生の大恩を忘れた事は有りません。「師の恩は山よりも高く、海よりも深い」と昔から言い伝えられて居ります様に、今以て先生の大恩を忘れた事は有りません。先生の当時の「民族無差別教育精神」の偉大さが深く当時の幼い私の肝に深く刻み込まれました。当時、先生は、私を台湾の子供として扱わずに、日本の子供以上に可愛がって下さいました。先生

の誠心誠意、一視同仁の御教育方針が私の幼い心に銘じられて忘れられません。当時としましては、卒業生の一番は一番であっても台湾の人には与えられない中で、先生は私に卒業生代表として色々な賞を授与して下さいました。今以て、先生の偉大さに深く感謝し続けて居ります。」（※新仮名・旧仮名使いを新仮名使いに統一し、一部誤字等を訂正。）

また、同じく塩水鎮在住の李〇〇さん（教師）の昭和 52 年 8 月 29 日着信の手紙には、近況等を濃やかに記す言葉の端々に、恩師に対する深い敬慕の情が込められている。

「御手紙有難く拝見致しました。恩師の貴方様から先にお便りを戴いて全く恐縮の至りでございます。五月初旬、塩小校友の会合の時、辻〇さんから先生の近況を聞き、頗る御健在とのこと、誠に喜びにたえません。先生の御芳筆を拝し、あの頃の真面目な御性格と愛のこもった厳しい熱心な教授法、何時も放課前に行われた算術の暗算競争など、自然に臉に浮び上って参ります。

私は、昭和 8 年に当時の台南師範七年制演習科の第一居生として入学し、昭和 15 年に卒業してからずっと教育界に勤務、今年で 37 年余りになります。その間、約 7 年は国民学校に、昭和 22 年からずっと国民中学に務めています。（中略）終戦 2 か月前に塩水の町は米軍の爆撃で約 7 割ばかり市区改正後の立派な街並みは破壊されたので、やむなく他郷から帰って来まして今日までずっと生まれ故郷にくすぶっている次第です。

あれから約 25 年になりましょうか、同窓の木原〇〇さんの弟、〇〇君の橋渡しで日本の同窓の皆様とも会う機会を得ました。特に 5 月 21 日の 20 余名の方々の訪台で、ほんとうに小学生の昔にかえった気持ちになって楽しく語り合い、愉快な一日を過ごしました。先生も御一緒においでになっておられたらと残念に思っています。」（※旧仮名使いを新仮名遣いに、旧漢字を新漢字に統一し、数字を算用数字に変更、一部誤字等を訂正。）

このほか、台南市の公務員、陳〇〇さんの手紙には、「終戦からもう 40 年になりました。台湾は、日本人の手によって開発され、教育、農業、工業等、各方面にわたって大きな進歩を遂げました。貴国の方々が遺した貢献は、私共 50 代、60 代の人々でないと判りません。私共は何時でも感謝しています。」とあった。

これらの手紙は、いずれも見事な筆致で綴られている。字の美しさといい、文章の確かさといい、また、そこに見受けられる精神の率直さや心情の深さといった内実のいずれを見ても、往時の台湾教育のレベルの高さと教師の教育姿勢の確かさを思わないではいられない。

松岡明という名もない教師が台湾の子供たちの心の奥深く遺したものは、このように長い時を経ても、着実に生き続け、寧ろ、成長し、大人になっていく子供たちの人間性を育み続け、さらにその成熟をさえ助けたのである。そこには、子供たちが生涯忘れ得ないような言葉を語り、人としての理想の在り方を振舞ってみせた教師、松岡明の真摯な自己修練の日々があったに違いないのである。

今の日本の学校に、このような師弟のつながりを育む環境がどれほど維持されているかを省みると、まことに心許ない思いにさせられるのであるが、これらの便りの言葉の数々は、私達がこれまで知らず識らずのうちに失ってきたもの、忘れ去ってきたもの、そして、取り戻さなければならぬものを、率直に諭してくれるようである。このような思いを永年迷うことなく大切にしてきた教え子たちの言葉と松岡明先生の面影を辿りながら、今の世の有様を省みる機会にしたいものである。

※（松岡明さん・忠明さん、内村鑑三以外の個人名については、一部を伏字とさせて頂いた。）

■ 訪台記

本会会員 野元政司（国際交流ボランティア日本語教師）

《4月の訪台》

平成30年2月25日に益城町文化会館で行われた「志賀哲太郎先生顕彰のつどい」と「日台友好交流会」に、台湾台中市大甲区から王澤佳副区长以下10名の皆さんが参加されました。

益城訪問を終えた訪台団一行を阿蘇・長崎・福岡へと案内している最中に、張慶宗さん達から台湾訪問のお誘いを受けた私は、指定された4月に台湾へ渡りました。

台湾滞在の期間は、2018（平成30）年4月10日～24日。大甲区にある鎮瀾宮の祭典「大甲鎮瀾宮媽祖進香」が4月14日～22日まで行われるのに合わせての招待でした。この祭典は、世界三大巡教の一つで、100万人が参加して、台中市の大甲鎮瀾宮から新港奉天宮まで往復約340kmの距離を移動するというものでした。私は、張慶宗さんと共に、自転車に乗り、「大甲鎮瀾宮媽祖進香」の進みに合わせて、徳化小学校の一輪車隊を先導して行きました。宿泊先は、中山小学校や活動センター、友人宅等でした。校長先生や保護者も一緒に行動しました。折り返し地点の新港奉天宮では、厳かな中にも盛大に行われた媽祖生誕祭に来賓として参加しました。この進香が想像をはるかに越えた式典であることに驚くとともに、媽祖信仰が台湾社会に深く根付いていることを実感しました。

大甲区に滞在中は、王澤佳副区长宅に泊めていただきました。この期間、徳化小学校だけでなく、大甲小学校と大甲順天中学校も訪問し、校長先生や子ども達との交流もしました。順天中学校では、中二の女生徒がパワーポイントを使って流ちょうな英語で学校紹介をしてくれました。大甲小学校では、校内放送を英語で流しているところを聞き、台湾の学校が英語教育に力をそそいでいることを知りました。また、議員さんや商店主等とも数多く出会い、いわゆる大甲人との交流を深めることもできました。

出会った台湾の人たちは誰もが親切で温かく接してくれました。



訪台団による歓迎会



劉來旺区長との再会



王澤佳副区长との再会



一輪車隊の先導



大甲媽祖進香



媽祖生誕祭 新港「奉天宮」

《9月の訪台》

澎湖島出身の方から案内があったので、9月に台湾の西部にある澎湖島に行きました。そこでは、偶然に昨年5月に台中市大甲区鐵砧山の案内でお世話になった鍾紹雄氏とも再会し、滞在期間を一日延長して台湾の生の歴史を教えてくださいました。

大甲区では、大甲区役所、徳化小学校、大甲小学校、順天中学校を再訪し、親交を深めました。徳化小学校では、大甲特産のタロイモの栽培をしている畑やそれをモチーフにした壁面づくりの様子を見てきました。大甲小学校では、校舎建て替えのシミュレーションを映像で見せていただきました。

順天中学校では、木々が豊かな校庭を見せていただきました。私は、どの学校の校長先生にも熊本市と益城町の風景写真を見せながら、熊本市と益城町の様子を紹介してきました。

地元の中秋節の会食会に参加したり、志賀哲太郎先生の教え子の家にも訪問したりして絆をさらに深めてきました。



中秋節の会



訪熊団による歓迎会



大甲小学校



徳化小学校 タロイモ畑



順天中学校 散策

■ 志賀哲太郎顕彰会ホームページのご案内

本会では、平成29年10月にホームページを開設しました。
各種資料、催しのご案内等を掲載しております。「志賀哲太郎顕彰会」で検索してください。

(表紙)



台湾台中市大甲区「文昌宮」

熊本出身でありながら、地元でもほとんどその名を知られていない伝説的教育者がいます。

その人の名は、志賀哲太郎といいます。

日清戦争後、我が国に割譲された台湾で、公学校（台湾人の小学校）の教師となって多くの人材を育て、また、大甲の街（現台湾台中市大甲区）の人々にも大きな影響を与えた志賀は、死後90余年を経た今日においても、台湾では「大甲の聖人」として多くの人々に敬愛されています。

志賀は、学問の神様・文昌帝君を祀る文昌宮に祀られるとともに記念室が設けられ、その遺徳は今も語り継がれ、学び継がれているのです。

志賀は、慶応元年（1865）肥後国上益城郡田原村（現上益城郡益城町田原）で鍛冶屋の長男として誕生しました。その2年前の文久3年（1863）に、2kmほど離れた杉堂村（現益城町杉堂）の矢嶋家において徳富猪一郎（蘇峰）が生まれています。（矢嶋家は蘇峰の母・徳富久子の実家）

この二人の恵まれた才能は、やがて、それぞれの色合いの大輪の花を咲かせることとなります。

徳富蘇峰は、ご承知のとおり、ジャーナリストとして終生華々しい道を歩みました。

一方、志賀哲太郎も、青年期に九州日日新聞（熊本日日新聞の前身）の記者として活躍する傍ら、紫溟学会会員、国権党员として、佐々友房や古荘嘉門、安達謙蔵ら（彼らは後に国会議員となり、また、大臣や県知事となって活躍します）と政治運動を展開するなど、時代の先端を走るような活動をしました。しかし、やがて、政界を離れて教育の道に志し、一介の雇教員（代用教員）として台湾の子どもたちの教育に半生を捧げました。

志賀哲太郎のすばらしさは、台湾教育史に残るような偉大な成果を上げたことのみにあるのではなく、「大甲の聖人」と呼ばれるほどの、その人間性にあります。知れば知るほど、その崇高な生き方は、今を生きる私達にも深い感銘を与え、同郷人としての誇りを抱かせてくれます。

志賀の教育姿勢は慈愛に満ち、街の人々に対しても思いやりが深く、植民地台湾においてともすれば優越的な言動をしかちであった邦人が多かった中で、少しも人々を差別するところがなく、一人の人間として対等に接し、親密に交わったと言われています。

当時としてはとても考えられなかったような、異郷の地における徹底した平等観と人間愛。

時代を先取りしたような普遍的な博愛精神が育まれた根源は、いったいどこにあったのでしょうか。

知れば知るほど人を引き付けてやまない志賀哲太郎の気高さ、それでいて人間味あふれる温かい心情、自らに厳しく他者にやさしいおおくゆかしさ・・・今なお多くの謎に包まれた聖人の足跡を辿っていただければ幸いです。

志賀哲太郎顕彰会（会長 宮本睦士：益城の歴史遺産を守る会会長）

(ホームページの概要)

〈ホーム〉

■新着情報

■会長からのご挨拶

■志賀哲太郎先生について

志賀哲太郎先生のおもかげ

パネルで迎える志賀哲太郎先生の足跡

志賀哲太郎資料集 (170 ページに及び学術的資料です。)

■年表

■動画 台湾台中市大甲区公所制作のアニメーションビデオ (大甲区の許可を得て日本語に吹き替えております。翻訳・徐秋美、監修・李久惟、ナレーション・宮崎泰樹)

■お問い合わせ

■台湾台中市大甲区との交流

■相互リンク

〈志賀哲太郎顕彰会〉

■本会の歩み

■会員募集

■顕彰会事務局

※各項目の詳細について、ぜひ、ホームページをご覧ください。

URL: <https://shigatetsutarou.cloud-line.com>

■ 志賀哲太郎先生の顕彰碑建立計画について

志賀哲太郎顕彰会事務局

台湾台中市大甲区の鐵砧山南麓の志賀哲太郎先生の墓地には、下の写真のとおり、大きな墓碑と顕彰碑が建立されています。

墓碑は、先生が亡くなられてから2年後（大正15年・1926年）に、顕彰碑は、先生の生誕百年の記念の年（昭和41年・1966年）に、それぞれ、教え子達が建てたものです。

先生の墓碑の裏面には、先生のご事績やお人柄について詳しく漢文で書かれており、また、生誕百年記念の顕彰碑の裏面には、当時の台湾政府の行政院長であった孫科（孫文の子）によって綴られた碑文が刻まれています。

先生は、平成24年（2011年）、大甲区の文昌廟（学問の神様文昌帝君らを祀る祠。日本の天満宮に相当）に祀られることとなり、幾つかの啓発冊子が作られて文昌廟を訪れる見学者に配布されており、また、アニメーションビデオも制作されて、児童生徒の教材となっています。



教え子達が建立した墓碑



顕彰碑（前は澤田寛旨氏）

台湾では、逝去直後から顕彰活動が行われ、国民党政権の逆風の時代を経て、今もなお「聖人」として敬愛されている志賀先生ですが、出身地熊本には、殆どそのご事績を顕彰するものがありません。

先生は終生独身であられたため、熊本の先生のお墓は、当初、益城町田原の杉林の中にご両親のお墓の傍に建てられ、小谷の澤田家に嫁がれた妹ミノさんが永く志賀家の墓所も併せてお守り下さっていたそうです。そして、平成2年、ミノさんの孫であられる澤田寛旨氏が熊本市営桃尾墓園に両家のお墓を移され、現在に至っています。

生誕地である益城町田原付近には、偉大な先生をお慰みするものが殆ど見当たらないことから、本会としては、益城町民、熊本県民、特に将来を担う子どもたちに先生のご事績を知って頂くためにも、先生の顕彰碑を是非とも建立したいと考え、計画の実現に向けて検討を進めております。

顕彰碑建立には、多くの皆様のご協力が必要です。これまでにも、物心両面にわたり沢山のご援助を頂いて参りましたが、今後とも、皆様のご理解とご支援をあらためてお願い申し上げます。

◆ ご協賛の広告、ありがとうございます。 ◆

癒しの **みらくる**
整体院 **身楽来**
真心こめていやします！
ご予約 ☎ 096-295-2532
定休日：毎週木曜日・第3日曜日
益城町馬水 863-1
セジュールサンハイム A102号

水廻り修理、水漏れ修理、何でも困った時はご連絡下さい。
明興設備株式会社
取締役社長 勝俣幸治
TEL.096-232-2546
FAX.096-232-2539
菊陽町津久礼 2356-2
管工事[上下水道工事、給排水衛生設備、冷暖房空調設備] 土工工事

私達も応援しています
嘉島文子(和水町)
熊本県小中学校校長会
事務局有志


 **豊礼の湯**
ホワイトブルーの
にごり湯につかり
山の静けさを聴く
涌蓋山を眺めながら・・
コインタイマー式貸切風呂 (檢造・石造・露天)
定休日なし 家族風呂 24時間 大浴場等 8~20時
簡易宿泊施設「豊礼の宿」併設 駐車場 70台
小国町西里 2917 ☎ 0967-46-5525

車検・点検・钣金塗装・新車・中古車
各種ローンOK・スズキ代理店
河端自動車整備工場

☎ 286-2315
☎ 284-6030
(夜)286-6323
益城町上陳 432
Safe Driving ∞ Happy Carlife

 **熊本大同青果株式会社**
オリジナルブランド 熊本とっぺん野菜
お届けします！安心安全・確かな味わい！
代表取締役会長 月田求仁敬
代表取締役社長 月田潔孝

熊本市西区田崎町 484
TEL.096-323-2505 FAX.096-323-2503

新しい キムチ
わ ぼんしょう
倭播椒 **キムチの里**^{さと}

有限会社 吉原食品
益城町安永 621
TEL.096-286-7676 FAX.096-286-7868

志賀哲太郎先生の菩提寺
浄信寺
浄土真宗本願寺派
寺院絵師稲垣石斎や京佛具の絵師が描いた本堂や御内陣の天井絵は貴重な文化財
樹齢 250年の白木蓮も銘木
益城町田原 327 ☎ 096-286-2623

 **金光教木山教会**
金光教の神様は、広大な天地のあらゆるものを生かし育む神様です。
結婚式・宮参り・七五三・お祓い・地鎮祭その他
ご要望に応じて祭典を執り行います。
益城町宮園 574
TEL.096-286-2257 FAX.096-286-2819
肥後銀行木山支店東側の路地を北側に入ると教会があります。

30年間続いてきた日台交流！ 温かい絆をこれからも！

小国国際交流会

会長 河津友子
廣瀬 勝 児玉政俊

- ◆ 台湾の文化大学生のホームステイ (3泊4日)
- ◆ 農家生活体験
- ◆ 日本の歴史・社会研究

志賀哲太郎顕彰会について

【設立の趣旨】

本会は、「大甲の聖人」として台湾の人々に深く敬愛されている益城町津森出身の教育者「志賀哲太郎」の功績を明らかにし、益城町をはじめ広く熊本県内外に周知するとともに、その顕彰に係る諸事業を通じて、台湾台中市（大甲区）と益城町との交流を深め、益城町及び熊本県の教育・文化・観光事業及び諸産業の発展に資することを目的としています。

【構 成 員】

- 会 長 宮本睦士（益城の歴史遺産を守る会会長・上陳）
- 会 員
- 【町内】 植山洋一（木山） 城本誠也（赤井） 城本真澄（赤井）
松野陽子（木山） 堀田 清（馬水） 齊藤輝代（古閑） 市川雅浩（古閑）
守田 喬（宮園） 森本正敏（安永） 松野伸子（寺迫） 折田豊生（馬水）
- 【町外】 澤田寛旨（八代市） 澤田 光（熊本市） 樋口利雄（熊本市）
白濱 裕（熊本市） 廣瀬 勝（小国町） 増田隆策（熊本市） 内田圭二（熊本市）
外口栄一（熊本市） 外口キヨ子（熊本市） 彌富照皇（熊本市）
藤門豊明（八代市） 永田 誠（熊本市） 野元政司（熊本市）
- 賛助会員
- 【町内】 片岡涼一（辻の城） 西 たよ子（辻の城） 青木国広（木山）
- 【町外】 原 秀志（大阪府茨木市） 宮本光雄（熊本市） 澤田荔子（八代市）
澤田理子（荒尾市） 有橋口石彫工業（熊本市） 笠井義雄（熊本市）
松田弘幸（熊本市） 馬場園弓子（熊本市） 天野和也（熊本市）
- 協力会員
- 【町内】 秋月恵一（島田） 身楽来：井手幸代（馬水） 山辺剛士・陽子（安永）
折田登和子（馬水） 亀山一茂・成予（馬水） 折田安正・麻美（辻の城）
- 【町外】 白浜靖彦（北海道・江別市） 白濱まゆり（熊本市）
山崎正人・宇代（福岡市）
- 顧 問
- 木原 稔（自由民主党国会対策副委員長・前財務副大臣・衆議院議員）
稲田忠則（益城町議会議長）
坂田敏昭（益城町教育委員）
永田壮一（東熊本病院理事長・前熊本大分ロータリー統括管理者）

【主な事業】

- ・教育啓発 講演会・研修会開催。パンフレット・リーフレット等の配布。HP開設。etc.
- ・図書出版 「志賀哲太郎小傳」(H29)・「志賀哲太郎資料集」(H30・H31)・会誌刊行。
- ・提案提起 関係機関への提言（国際教育・国際交流・観光・交易の推進等）
- ・連携調整 日台友好親善に関する関係市町村・団体との連携組織の設立・情報交換・交流

※ 益城町企画財政課、益城町教育委員会、熊本県地域振興課・国際課・交通政策課、熊本県教育委員会の御指導を仰ぎながら運営しています。

■ 会員募集

会員を募集しています。

歴史の好きな方、大歓迎です。ただし、本会は、個人的な研究発表や学習の場ではありません。また、政治的・思想的・宗教的活動もできません。

本会の活動は、志賀哲太郎に関係する教育・文化・産業振興及び地域・国際交流を目的としたボランティア活動です。多くの皆様の善意のご協力をお願いいたします。

◇正会員

- ・会の運営に参加し、発行物の提供を受けることができます。
- ・月例開催の会議に参加していただきます。(できる範囲で結構です。)
- ・年会費は、3,000 円です。

◇賛助会員

- ・会の活動を側面から任意にサポートしていただきます。
- ・会の活動状況の報告、発行物の提供を受けることができます。
- ・年会費は、2,000 円です。

◇協力会員

- ・広報など、近隣の会員の活動を臨時にサポートしていただきます。
- ・臨時に発行物の提供を受けることができます。
- ・年会費は、不要です。ただし、任意のご寄付は大歓迎です。

【志賀哲太郎顕彰会の歩み】

- H27.09.06 発足（会長：松野國策=熊本県文化功労者・熊本歴史学研究会会長）
月例会議において諸課題を検討。
- H28.02.26-29 代表者 7 名が台湾台中市大甲区を訪問
（大甲区長表敬訪問・志賀哲太郎墓前祭催行・資料調査等）
- H28.04.14 熊本大震災により活動中断
（5/28 に開催を予定していた志賀哲太郎顕彰講演会は平成 30 年に延期）
- H28.08.07 臨時会議
- H28.11.16 月例会議再開
- H28.12.29 松野國策会長逝去（※志賀哲太郎の命日と同日）
- H29.01.14 新会長選任（会長：宮本睦士=益城の歴史遺産を守る会会長・元小中学校校長）
- H29.02- 県内各地で志賀哲太郎パネル展を巡回開催
- H29.03.05 益城町保健福祉センターで「志賀哲太郎研修会」開催（約 100 名参加）
- H29.03- 県内各地でミニ講演会・研修会を実施
- H29.11.16-19 代表者 12 名が台湾台中市大甲区を訪問予定（墓参・交流・調査・研修等）
- H29.12.10 くまもと県民交流館パレア（熊本市）において日台交流会（100 人）を開催
- H30.02.25 益城町文化会館において講演会（400 人）・日台友好交流会を開催
- H30.12.16 益城町保健福祉センターで「李久惟先生講演会」開催予定

■ 志賀哲太郎顕彰会

事務局 〒861-2242 益城町木山 556 番地 20 植山方
（電話）096-286-8268

【お問合せ先】

事務局長 植山 洋一 〒861-2242 益城町木山 556 番地 20
（電話）090-1087-6213 E-mail: ueyama-1@seagreen.ocn.ne.jp

事務局員 折田 豊生 〒861-2232 益城町馬水 848 番地 10
（電話）090-8399-4854 E-mail: olita@lep.bbq.jp